

1972年5月3日発行

むくげ通信 12

■ むくげの会 ■

神戸市理水区多額台3-10-25-201 飛田才

◀ 目 次 ▶

■ 金石範(キム・ソクホム)氏講演	3ページ
■ 講演の感想	7 〃
■ 三・一独立運動	9 〃
■ 広開土王碑文について	13 〃
◀ 連載 ▶		
■ 種 域	16 〃
■ 朝鮮古謡	16 〃
■ むくげの会活動報告	17 〃
■ 朝鮮をめぐるコース	18 〃
■ 活動日程	18 〃
■ 会計報告	2 〃

の件にせうまつた。「むくげ通信」にもお送りします。

本誌は、3月5日、御影公会堂で開いた、三・一独立運動5周年、日本と朝鮮を考える集会の内容を中にまとめたものです。

私たちがむくげの会は、三・一集会を次の様な主旨で開きました。

1. 三・一独立運動の歴史的意義を考えること
2. 日本と朝鮮の関係は、過去において侵略-被侵略

加害-被害の関係としてあり、その関係は、現在もなお変わっていない。私たちが日本人が「朝鮮」について考える時、まひやりに「この関係を歴史的-現在の回廊までも含めて」に押えることから出発しなければならぬ。しかし、この加害-被害という関係を押えることには、み終始するだけでは不十分であり、ガング、自己批判のみをくり返していても仕方がない。

この基本的な関係を押えつつ、さらに一歩進んだ新しい日本と朝鮮の関係を構築していかなければならない。それには、日本人としての主体を確立し、新しい視点を獲得していく作業を、私たちはやっていかなければならない。この「作業」への足がかりを得るといふ集会所指し。

集会は、やく30名の参加で行なわれ、この2つの目

的。一定程度、達成されたものと考えています。2-
「むくげの会」としては、これからも、定期的な集會の外に、「集会」を、広く、みなさんに、呼びかけます。

会計報告 1972 219~5.1

収入		支出	
クリニシ	4052	部屋代	3140
会費	5700	(3.4.考)	
カンパ	2650	切手代	4750
印刷料	6000	封筒	288
資料収入	5380	葉書	1000
集会収入	3075	原紙	2355
(考)		コバン紙	1775
		XEROX	1775
		コピー	1083
		TEL	3000
		考金入惠	1649
計	20457	計	4966
残高			



日本と朝鮮の新しい地平を求めて

金 石範(キムシクボム氏)

・はつめいー

今年の三・三朝鮮独立運動(53周年)記念集會
△日本と朝鮮の新しい地平を求めては、作
家の金石範氏を講演者に迎へ三(五日)に南
くことができました。以下に、録音テープを
もとにムラゲの会の責任において、講演内容
の要旨を載せてみたいと思います。

・朝鮮が遠くまで

朝鮮人、主に在日朝鮮人と日本人の間における連帯
の人的条件とは何か。朝鮮人と日本人の間における
価値な自由とは、この問題を一つ考へてみたい。

最近、三菱の株主総会で反軍産一株運動を行って
るが平連に向つて会社は雇ひれた右翼が「チョーセン
」という言葉を投げつけ、吉川第一氏は三回は少く
も聞いたといつことを知つて大變驚いた。日本人が同
じ日本人に対して「チョーセン」という明らかな蔑稱
を放つ、その日本人の意識の底にまだ暗い部分が層と
してあることを改めて思い知らされた気がするのであ
る。そして軍産会社と結びついた形で現れている事実
に二層その感を深くするのである。

一般的に、朝鮮は日本人にとって客観的、対等な存

在ではない。朝鮮語を習ひ始めた知人の日本人が「朝
鮮語を習ひ朝鮮を少し知り始めると、自分から朝鮮が
遠のいていく気がする。」と言つていたが、私はこの
言葉に感動を覚えた。彼は朝鮮を知ることによって、
朝鮮の主体を認めてしまった結果になつたのだと思つ
ふ。ふつは、知る事によつてより近くならなければ
嘘だらう。遠のいて行くかの様に見えて、実は逆に近
くなつて来ているといふ、そつう逆説的な関係に日
本と朝鮮はいるのである。ベツタリとくつついてい
様でいてそつでない両者の関係を二度引き離して、日
本人も朝鮮人も客観的な冷静な目でお互を見つめ直す
必要があるだらう。馴れ合いから連帯は決して生れな
いのである。

・同情による均衡

特に意識の面から朝鮮人と日本人の關係を見てみた
い。両者の關係は被害者と加害者といふ關係にあると
言える。(歴史的にも明治政府ができて以来そつであ
る。)そして朝鮮人の側から日本人に向つて歴史的責
任を告発された場合、日本人の中でも良心的な人々が
示す典型的な理解のタイプとして同情をあげることが
できる。被害者と加害者といふ民族的立場のみ、過
去を朝鮮人に責められると、日本人はモラルとして絶
句せざるを得ないだらう。しかし、そつで終つてしま
つてはならないのである。なぜなら、同情(者)は
必然的にその対象としての被同情(者)を必要と

するものである。同情する側には或る意味で良心の安泰が付きものである。同情される側は同情されることで何となく満足してしまふ。植民地根生・奴隷根生がまだ残っているからである。

朝鮮人が日本の新聞に書く場合でも、日本のジャーナリズムは朝鮮人が日本を告発する線までは受け入れるが、その線を二歩越えて朝鮮人が主体を主張し始めると余り喜ばない傾向が現にあるのである。そしてジャーナリズムのみならず、日本語で書いている朝鮮人自身の意識の中にも、朝鮮的なことを言いつつながら、ともすれば日本に非常に傾斜し無意識のうちにジャーナリズムの線と癒着している状況がある。癒着から身を解き、朝鮮人ははっきりと主体を打ち出さねばならない。同情し同情されることに甘んじていたのでは、とても自由・平等にはなれないからである。

この様に、加害・被害の關係、その反映としての同情で均衡を保っている關係からは、それを突き進む為の視点・方法を生み出すことはできないだろう。告発もそれなりに意味のあることではあるが、それに終始してしまつてはならない。加害・被害の關係をしつかりと見窮める作業を行いつつも、私達は相互に一步進んだ高い地平・水平に立たねばならない。

● 連帯の人的条件とは――

では同じ地平・水平に立つための条件、お互に自由

にたつたものの人的条件とは何だろうか。人的といふのは主体的という意味である。人間は主体を確立しなれば自由になれないからだ。

一般的に言つて、自由には不自由・束縛が付きものであり、在日朝鮮人の自由も一九四五年を境に、相対的にはあるが、かなり発展した。自由は歴史的に発展してきたという観点から自由の問題に「たゆみない・私かなぜ自由にならぬか」と言つと、自由と行動（為）は切り離せないからである。連帯が一つの実践・行動である以上、意識だけの連帯はあり得ない。

行為（動）について、サルトルの「人間は欠如している存在だ。」という言葉がある。これは、人間は全て満ち足りた存在ではなく、常に自分を乗り越えようとする意識があることを示している。例えば、不自由な状態から自由な状態へ乗り越えようとする時、そこには必ず行為が設定される。行為の底には想像力（イマジネーション）があり、現実からとび上る力、現実を否定することが想像力の本質だと言える。人間は想像力を発揮して現実を否定しない限り、物に近い存在になるのではないか。想像力を発揮しない限り人間は自由になれないので、想像力は自由と関つてくる。良くない現実をもつとまじめな現実にしよつとすることとは想像力という意識作用の結果であり、そう思つた人間が自分が乗り越えることと必ず關係してくるのである。自分も現実の中に含まれているからである。

あるといふこと。そして日本語は空気のよう「保障」
れている。ところが、在日朝鮮人の場合はその70%が
二世三世で占められている現在、自分が朝鮮人か何人
か分らないといふことで悩む人間が多く、言語一つを
とってみても決して空気の様に保障されたものではない
のである。いやは、朝鮮人は日本人よりもずっと欠
けた存在であり、欠けた部分を乗り超え人間としての
原卓に立ち戻る。その過程において民族的主体性が必
要なのだ。その過程は、真の意味でのインターナシヨ
ナリズムへ向う過程でもあるのだ。在日朝鮮人は、朝
鮮人であることを無の状態から闘い取ってきたものだ
から民族的主体性を叫ぶを得ないのである。あれ
はその必要はないのだから。

この様に、朝鮮人の民族的主体性を独善的な民族主
義、従来の日本のナショナリズムと混同されない様
この際お願いしておきたい。

・「在日朝鮮人文学」は日本文学ではない。

朝鮮人が日本人との関係において主体を確立してい
く問題で、「在日朝鮮人文学」に少し触れてみたい。私
の考えでは「在日朝鮮人文学」は、日本語文学ではあ
っても日本文学ではないと思つている。ところが殆ど
の日本人は「在日朝鮮人文学」を日本文学だと思つて
いるし、日本語で書かれたものは日本文学と思つてい
る。従つて、客観的に見ることができず、日本人の虐

に合わない「在日朝鮮人文学」が現われると、その
異質性ゆえに仲々受け入れることができないという
現象が起るのである。一方ロシア文学等翻訳文学とな
ると、当然慮が合わないので日本人自らサーヒス精神
を發揮して作品に歩み寄ろうとするが、「在日朝鮮人
文学」の場合は、作品が日本人の側へ歩み寄ることを
日本人は無意識のうち、期待してしまつてはならないか
。下手をすると朝鮮人作家までもが日本人の期待に合
せようとするが、その様なことでは、朝鮮人自身の主
体性の確立はおろか日本人に向つて主体性を要求する
権利もないだろう。

量としては微々たるものではあつても、日本人以外
の朝鮮人・中国人の詩人や作家が日本語で書いている
わけである。独自性をもつた「在日朝鮮人文学」を日
本人は客観的に、一定の距りを置いて見る目を持たぬ
はならないし、又朝鮮人作家は、日本語で書かれて
いても日本人読者が作品へ歩み寄ってくることを要求
しなければならぬ。私の様な考えに対して、日本の
文壇は良い顔をしないが、それは日本の文壇の中に
上から下を見下すような同情的な体質が以然として残
つているからだろう。

・苦しみの見られない連帯はない。

お互に現在を乗り超えようとする場合、朝鮮人が現
在保障されていない人権問題（入管令、外国人学校法

抽象的になってしまったが、この様な意識のしくみを考えないと、連帯は考えられない。最近つくづく思うのである。

● 身体的連帯とは

では、日本人と朝鮮人の関係における行動・連帯とは何か。告発することと告発されることも不自由であり、このお互に拘束し合っている関係をいかに自由にしていくのか、という問題が提出される。

再び両者の関係をおさえると、同情を被る側・被同情者というのは日本の「チャーナリズム」の癒着という例にも見られたように非主体的である。そして日本人は朝鮮人に向って同情しなければならぬから不自由である。なぜなら朝鮮人から同情してくれと突き上げられるからだ。その結果、日本人は常に原罪意識にとらえられてくる。

日本人が自由に行動するには、朝鮮人が差別され同情されているところのものを、朝鮮人が要求するからではなく日本人自身の肉面的な要求として取り除いて行かねばならない。仲方、朝鮮人の側では、同情を拒否するもの、主体的な条件を作らねばならないだろう。

在日朝鮮人自身が、朝鮮人は全面的に被害者であったのではなく、固いながらも被害者であったという視覚を喪失している。その視覚を取り戻さなければ、同情を被るのがおちだろつ。

私は、大阪の猪飼野で育ったが一九四五年日帝の末

期に、朝鮮のおばさん達は、教育も何も受けていないのだが、日本人の警官にすみでしみをつけられるという嫌がらせを受けながらもよく自然の形で朝鮮服をはなさなかった。それは立派な日々の暮らしの抵抗と見なければいけない。抗日パルチザンや三・一運動だけでなく、この様に生活の中にも大山の抵抗の姿があることを、他でもない朝鮮人、特に日本語でものを書いている朝鮮人が自覚してしまっている。そして被害者意識を前面に出した又はかり書いているようでは、日本人に同情してくれと申し立てるのと結果的には変わらないだろう。刃は相手に対してだけでなく自分にも向けられない限り、自分を乗り越えることはできない。

以上のことを前提に、加害・被害の問題を考えていかなければ、お互いに乗り越えることはできないだろう。

● ナチヨナリズムの区別を

どういつわけか、朝鮮人が民族的主体を主張すると日本人からナチヨナリズムという言葉が返ってくるが、ナチヨナリズムの区別がされていない様に思える。日本のナチヨナリズムは、世のものまで自分のものにしてつという侵略のナチヨナリズムであったが、朝鮮のナチヨナリズムは、本来自らのものであったものを取り戻そうとする抵抗のナチヨナリズムである。

生れてみて自分が日本人か何人かわからない、といつ日本人はまじらないだろう。自分が日本人で

察などに取り組んでいくことは、日本人の自由、日本人が自分を乗り越える問題と必ず結びつくのである。なせなら、朝鮮人の自由は日本人の自由と相関関係にあるからだ。この様な行動の原理を考えないと、ただ口先で連帯を繰り返すだけでは、どこに尺度をおいて連帯するのか解らないのである。

最近、「帝国主義と人民はちがうのだ。」という発言が朝鮮人の側からでなく、日本人しかも朝鮮問題に理解があると云われている人達からなされているが、民族的な立場を忘れ去った免罪論である。過去に犯すことも犯されたこともない真に平等な関係にあるのなら、人民同士の連帯も可能だろう。しかし階級的な立場にのみ目を取らぬ民族的な立場を喪失してはならない。同じ労働者とは言っても、日本人と朝鮮人では賃金一つにしても差別があり日本人労働者もそのことを当り前と思っていたのだから。しかも今道、権力者によって軋えつけられた差別感(特に母配の日本人に根強く残っている)のである。

この様な状況の中で「共通の敵は日本帝国主義である。我々は国際的に、階級的に、労働者として手を結ぶのではないか。」などと云つと、いかに連帯が容易に考えられやすい。理路整然とはしているが、そこには言ひみが見えられないのである。真に連帯するためには、日本人も苦しみ、朝鮮人自身も苦しみ、そしてお互いに乗り越えて行かねばならないだろう。理路整然と尺子定規で線を引いたような連帯では、すぐに壊れてしま

てしまうだろう。我々の連帯はすぐに壊れる様な連帯では困るのである。

こういう方向を持たずには、連帯は現象面にとどまるだろう。真に自由な関係にあつては、相手を侵してはいけないという人間的なモラルの上での不自由で、拘束が付きものである。我々朝鮮人と日本人の関係も最終的にはそこまで行きたいと思う。しかし今のところは、別の意味での拘束し合った部分を互に取り除く努力をして行かねばならない。そして、お互いの民族的主体を認めながら、しかも自由であるという関係を目指さない限り、連帯は非常に難しいのではないだろうか。

(二頁 No)

金石範氏の

講演をきいて

とにかく金氏の作品を読んでおこうということ、
「る徳幽霊奇譚」を讀んで言海をきいた。日本人が手離しに面白がることは許されないかも知れないが、とにかく面白い本で、私は主人公のる徳がいっぺんに好きになったのだ。これだけ心豊かな作品を書く人はどんなだろうと思っていたが、まるでる徳みたいな人だった。

講演は、主に朝鮮人の主体性ということ、結局、

日本人の主体性については、我々日本人が自ら考え獲得していかねばならないと考えさせられた。

「万徳幽霊奇譚」を読んで、今まで読んだ在日朝鮮人作家の作品に比べて感したのだが、それは舞台が朝鮮といふこともあろうが、講演で氏が指摘しておられるように、在日朝鮮人作家が、日本人の同情を醸成する質を抜け出すような作品を書くべきだという主張の結果なのだろうと思った。

成程、私などは作品の中で朝鮮人の日本人の差別に対する苦発、警戒心、おびえといった描写があると、差別を考えている者といった自尊心を満足させていた。が、金氏の作品に接した時のある種の「戸惑い」は、そうしたレベルで止っていた認識の世界を揺るがせた。金氏がその哲学的な論理展開の中で日本人に問いかけていたものは、日本人が加害した場合、日本人が勝手に「被害者像」としてとらえていたところの朝鮮人の姿ではなしに、万徳のようなおどろかぬ勇敢さでもって斗った朝鮮民族像をどきりと日本人の前につきつけることよって、加害者として自己を告発している日本人も含めて、誤りのもととなっている認識（つまり私の「戸惑い」とは偏見の証しであり、公式化された加害の論理の空念仏の域を出るものではなかった）ことの証しであったのだを、再び原点から日本人が向い直すべきだということではないだろうか。

金氏の意見を聞きたい奥（李氏の芥川賞、日本文学

と日本文学を区別した点など）もあつたが、時間の都合でできなかった。

帰られる時、「日本人も朝鮮人もどちらもが苦しいと解決しないですよ。」と言われた。今回の講演を聞いていて、金氏の中に、被害者者の被害者意識をひとつの論理立ての中でのりこえることにより差別の壁を打ち破るつとする執意と、そして、どうしようもない位醜いところの差別する日本人に対する怒りと混在したなにか慈愛みたいなものを感じた。

限らない血の負債を朝鮮人に負った我々日本人が、そして現在、朝鮮再侵略の足音を聞いている、そういう地点から、いかなる方法、努力、「苦しみ」をすべし、氏のいう「対等の地平」に辿りつけるのか？——日本人の主体性というものの問いは、貪しくも安穏とした日常性に浸る私の内部で、こわれたスピーカーの音のように拡散、収束の単調なサイクルをばね回っている。

やや景観的なところで考えると、未来に開ける朝鮮人と日本人の「対等の地平」を前提とした作業もまたひとつの課題となってくるのである。

(丁・丁)

三二 運動報告

一八七五年江華島條約に始まった日本の朝鮮侵略は
一九一〇年の「日韓併合」によって、その前史を終え
、一九四五年までの三六年間の植民地経営を通じて、
経済的、文化的、人的振奮を行った。そうした日本帝
国主義占領時代の中で最もとも大規模な独立蜂起が一
九一九年三月一日のそれである。私達はこの独立蜂起
の一才の側に歴史的に立って、注目に注目し、明日
の日本と朝鮮のあるべき姿を求めて、朝鮮三、一独立
運動を見ようと考へる。

▽日帝の植民地政策と朝鮮社会事情

「日韓併合」を行った日本帝國主義は植民地支配の
経済的基礎を構築するため、中央集権的憲兵警察政治
を行った。「総督府」を設置し、「総督を現役陸海軍
大将から任命し、天皇直屬の下、朝鮮の立法、司法、
行政及び軍事統帥権を統管した。又陸軍二ヶ師団、海
軍二ヶ分遣隊、中備隊、二万の憲兵、二万の憲兵補助
員を配備し、朝鮮を「滿州侵出のための橋頭」とし
、又根強く斗う朝鮮独立ゲリラに対処したのであった。

寺内が「八道江山（朝鮮の異名）静かなり」と豪語
したが、一才朝鮮人民は新肉款規則、集會取締の件
、保安法、出版規則、教育令、書堂（日本の寺小屋
）規則等によって、言論、出版、集會、結社の自由
を奪われ、「不程鮮人」の烙印をあしつけられ、多
くの愛國的朝鮮人が検挙投獄された。その数一九一
二年五万名以上、一九一八年一回万名以上であった。
日帝が行った経済政策は朝鮮を日本の食料、原料
供給地と商品販売市場にするものであった。併合
前から手がけた土地調査事業を大々的におしす
すの、一九一八年までに二千四〇万四余の巨費で、
これを完了した。これは①資本制社会にみあうよう
土地所有権を確立し、②日本人の土地所有を合法化
し、③土地の肥沃、面積算実質的調査を目的として
いた。この結果(1)封建的小作制度（兩班一佃戸）が
世襲的であつたのを自由契約によるものへと変化さ
せ、植民地的小作制度として温存させた。(2)共有地
が一部の悪徳地主によって私田化されたり、国有の
名の下に、日帝が没収し、手續違反、証拠不充令符

のいんぬんをつけ、又無知につけこみ、十七万七千五百町歩の田畑を、山野水田、畑を合計すれば八八万町歩(全土の40%)を朝鮮人民からかすめとった。当時土地は封建地代(小作料)・食料、原料の供給といふことから有力な投資対象であった。小作料は五〇、八〇%で統督府の土地税収入にあつて一五六万九千円にもなつた。一九一六年当時二百萬の朝鮮の農家が(全農家の七七%)が小作ないしは自作兼小作であつた。(3)こつした結果、朝鮮農民は小作契約期間満期とともに、飢餓、流浪し、火田民にならるか、であつた。そして日本へ、ソウルへ、満州へと流れてゆかざるを得なかつた。

日帝はまた一九一一年森林令を發布して朝鮮の全林野面積の四二%に及び六七〇万町歩を国有林と称して奪つた。李朝時代封山禁山として保護されて来た朝鮮の山林は日本が朝鮮から敗退する時までには丸山にされた。そして又田畑をつばれ火田民になつた朝鮮人を森林令違反で毎年四、八千件も検挙した。

水産資源に於いても又日本人の独占するところとな

つた。一九一八年当時朝鮮人漁夫二七名で一四六七万円の水あげに対し、朝鮮漁場におよせる日本人漁夫七万名で一八一九万円の水あげであつた。又動力船の所有に於いても朝鮮人五八件、日本人三〇件と漁獲力にも差があつた。日本人がいつても大漁の歌をうたつていたのに反し、朝鮮人はいつも飢餓状態であつた。統督府は鉾床を調査し、鉾山を日本財閥に与え朝鮮の地下資源を奪つた。鉾額は一九一一年六一八万円から一九一九年には三五四一万円に増加した。しかし一九一八年当時朝鮮人の鉾産額はわずか三〇万円であつたのに、日本人のそれは二四六七万円と著しい差があつた。

工業も「会社令」によつて朝鮮の民族資本の発展を抑圧し、朝鮮ブルジョア階級の成長さえ抑圧した。それでも一九一一年一五二社から一九一九年三六六社と朝鮮人の会社がふえた。「会社令」は日本の財閥企業の進出を保護した。その当時又鉾産業が鎮南浦製鉄所を、三菱が兼浦製鉄所を、小野田セメントが勝湖里セメントを立てて企業活動を行つた。

日帝の工業部門で本格的に朝鮮に手を出すのは一九三〇年代からではあるが高利貸、精米業、米商人、雜賣商人等商人の活動はこのころは既に活発であった。こうした侵略活動に金融的に保障したのが帝國貨幣法、朝鮮銀行法の制定であり、度量衡の統一等であった。

軍事と植民地支配のために大々的に鐵道、港灣、道路、河川、通信、航空等の交通、通信機関を整備した。鐵道に四九七〇〇万円、港灣に六四二三万円、道路に四三八二万円、河川に五三〇〇万円が一九三六年までに投入された。

朝鮮の政治、經濟、文化、社會等あらゆる分野で独占的地位をもつ日本人は江戸時代までは釜山傳館に七、八〇名にすぎなかつたのが一九一八年には実に三三万七千名に達した。その職業も官吏、製粉、米商人、高利貸、雜賣商人まで全分野におよんだ。その影響で、朝鮮は「取らうば州」、叛路さうば州、没落していった朝鮮人は数多く、一九一九年当時滿州へ五〇万人、ロシアへ三一萬五千人、日本へ二万人が流浪していった。

日帝下の反日斗争

併合後、朝鮮国内での公然たる獨立運動は不可能となった。多くの民族運動家は海外へ亡命し、亡命先で民族獨立運動を展開した。滿州では李相竜が扶民会を作り、沿海州では柳麟錫が獨立軍を計画し、漢城國では重光田を作り、ゲリラ斗争を行った。又米國では安昌浩が大韓國民会を作り、上海では呂運亨が新韓青年團を作り、北京では、申采浩が、東京では張徳秀が留學生を中心とした愛國の對外宣伝、啓蒙活動を行った。朝鮮国内では宗教団体と私立学校に身をいそめ民族の覺醒に努めた。日帝は一九一一年子内暗殺事件なるものをでっち上げ、愛國啓蒙運動の指導者ら六百名を檢挙し、一〇五人を起訴した。へ一〇五人事件ともいう。このころの反日斗争は大衆に依拠せず、支配者意識があり、一匹狼的独善的で、相互に對立する弊害をもつていたと云われる。

三、一獨立運動

一九一〇年から九年が立ち、日帝に対する民族的義憤は充分すぎる位、うっ積していた。

一九一七年世界列強の最も弱く環であつたロシア帝國に社会主義革命が勝利した。帝國主義とプロレタリアとの対立時代が訪された。ヨーロッパの革命、アジアの民族解放斗争の高揚はウイルソンをして民族自決主義を云わしめた。これはロシア革命を瓦解させる目的で發せられたものであつたが、朝鮮もその影響を受けけることとなつた。内のうづ横、外の世界情勢の激動化によつて、一九一九年二月八日東京神田YMCA會館から發せられた独立への雄叫びは朝鮮ソウルへ波及していつた。日帝によつて毒殺された鳳閣高、高宗の葬儀三月三日カニ日前を期して、独立示威行進を行つことを国内の青年、宗敎家は決定した。

一九一九年三月一日午後二時ソウル・パゴタ公園から發せられた朝鮮独立の叫びは朝鮮二一八郡中廿一八郡に、朝鮮人のいろ所ならざりども、老若男女を問はず、拳族的に波及していつた。學生は同盟休校し、商人は閉店ストを行ひ、平壤、釜山、美州、元山、...といろがいつた。安東では日帝の政治株植がうちこわされ、普州では三月二日熾烈な斗ひがあく

りいろげう水、大同郡では騎馬賊と血戦を行つた。日帝側の統計によつて三月、五月までに一四九一回のデモと二百万人の参加を遂ており、三日から十二日まで三二回余のデモがおこなわれた。デモ弾圧は殘虐を極め、最初の三々日だけで七五〇九名が殺され、一万五千九百余名が傷を受け、四万七〇〇〇名が捕縛された。そして負傷者、捕縛されたものの多くは毒殺・死せしめた。また水原提岩里、花樹里、ソウル十ヶ架事件毎日帝は各地で軍用毒殺を行つた。

三、一 独立蜂起で示こいた朝鮮民族の力は強大であつた。日帝はいままでの武断政治をやめ、ある程度、自由を認め、支配をお妙化した「文化政治」を行つた。

正史的 音心義

朝鮮ブルジョアジーの力量不足から、日帝の醜態を彈圧を受け、三、一以後民族解放斗争はマルクスレーニン主義の理論武装したプロレタリアートがその主導権をにきうように行ふ。朝鮮革命史の金字塔、世界

の解放人民に大なるはげまし(五、四)を示すことに
たよる。

てめぐりて碑王土南広

近代日本史学史における朝鮮古題

中塚 明

広南土王陵碑文の謎——李進賢より

最近、高松塚古墳の発見により、一種の、古墳ブームが起きているが、日本古代史、古代日朝関係史の、力キであるといわれる「広南土王陵碑」をめぐり、このごろ近年の「日朝」に三月号の中塚明論文、近代日本史学史における朝鮮問題」と、ことしの「思想」五月号の李進賢論文、広南土王陵碑文の謎の要旨を紹介し、碑文にまつわる問題点の一端を伝えてみた。注目すべき点は、両論文とも学問上の問題のみならず、朝鮮に對する日本人の意識構造を指摘していることである。

中塚論又は、金錫亨著「古代韓国南係史—大和政権と任那—」によって提起された問題に答えて書かれた。金錫亨氏の論文とは、日本でいわれている「任那日本府」というものについての根本的批判であり、ひいては四世紀半ばごろ大和朝廷が日本を統一したと

いう通説に根本的な批判を展開したものである。こうした批判は、日本古代史のみならず、日本歴史の全体系、および日本人の思想・歴史観に、今日の朝鮮人の立場から加えられた根本的な批判であるという。

中塚論文の要旨は次のとおりである。

①広南土王陵碑文が日本古代史体系に占める比重は大きい。「百濟新羅舊高麗民由來朝貢而後以辛卯年來渡海破百殘□□羅以爲臣民……」という三十二文字は、中学以上の日本史の教科書に必ずといっていい程引用されているもので、その解釈は「百殘(百濟)新羅はもと高麗臣なり。由來朝貢す。而るに後辛卯の年(三九一年)を以て來りて海を渡り、百殘□□新羅を破り、以て臣民と爲す」とするものが、あたり前となっている。この解釈に基づいて、後日大和朝廷として、後か朝鮮に軍隊を送り得る程だから、四世紀半ばには日本は大和朝廷を中心に統一されていったという学説が生み出され、これが通説となっている。広南土王陵碑は、「四世紀半ば大和朝廷日本統一説」にとって、いけば暗黒の灯台というべき役割をはたしている。

②広南土王陵碑は、一八八四年(明治十七年)に参謀本部の将校である陸軍砲兵大尉、酒匂景明(注一)この人物は後の研究で酒匂景信であることが明らかにされている)という軍人の手によって、その拓本が初めて日本にもたらされた。そして、拓本の解説、解釈の仕事は、参謀本部でひき続いて行なわれた。一八八四年というのは、日本の軍備が日清戦争をめぐり、大陸

作戦のため大々的に拡張、整備されようとする矢先であつた。この頃朝鮮では、壬午軍乱（一八八二年）、甲申政変などの事件があいついで起つてゐる。このよ
うな時期に酒匂景明なる軍人が、大陸奥深くうろつ
ていたのは、スパイ行為のためと推定できる。参謀本
部で示された碑文の解釈は、現在にいたるまでめんめ
んと引き継がれてゐる。異なつた解釈をしたものは、
日本ではなかつた。現在日本で「常識化」してゐる読
み方が、これなら朝鮮侵略を一層強めるために清国と
一戦をまじえようとしてゐる、そういう時に参謀本部
で読まれた読み方とまったく同一であるということの
意味は、あらためて向いなおさなければならぬ。

③ここで、碑文の漢文は誰が読んでも、すなおな読み
方をすれば変らないという反論が予想される。しかし、
誰が読もうと、どういう状況のもとで研究しようかと、
読み方、研究の仕方は同じであるといふのは誤まりで
ある。現に朝鮮民主主義人民共和国の歴史家たちは、
碑の問題の部分を「倭が辛卯の年に侵入してきたため
に、やがて高句麗は海をこえて彼らを撃破した」と逆の
解釈をしている。そして、この解釈は、碑文全体の正
確な読み方、当時の金石文の特徴から碑文全体の用語
方法、また当時の高句麗・百濟・新羅など諸国の国内
状況、三国の相る関係、三国それぞれの特徴関係など
の総合的観点から碑文の研究を行ない出された解釈で、
日本の場合は、こうした科学的研究による読み方では

ない。

最後に「日本の歴史学界が、第二次大戦後、格段に
進歩したことをわたくしも信じてうたなわぬが、こ
と古代の朝鮮にかかわる分野においては、明治二十年
代から、何ほどの進歩もとげていないのではないか、
ある意味では、明治二十年代の観念をより一層拡大し
たとさえいえるのではないか……」ことは広南土王陵
碑の研究や古代日朝関係の研究にとまらぬのである
う。近代史の分野でも同じような問題が存在するであ
らう」と指摘してゐる。

この中塚論文をさらに進め、碑文そのものがすりか
えられ、参謀本部はそれをごまかすために「石灰塗布
作戦」を行なつたと指摘したのは李氏の論文である。

李氏は、この問題を取り上げた動機として「共和国
の歴史家の提起した一連の問題が日本の学界に容易に
うけいられぬ理由の一つが、広南土王陵碑をはじめ
めとする初期朝日関係史にかかわる金石資料について
の従来の定説には全く疑問をはさむ余地がないとされ
てゐることにあると思われ、これを問題にすることは
くしては、従来の研究成果にたいする批判はおこらな
い」ためであるとしている。

李氏の論文の骨子は次のとおりである。

①明治十七年（一八八四年）初めて日本にもたらされたのは拓本で
はなく、酒匂景明が碑の一部すりかえたうえで双鉤（
字を上からなぞる）し、墨を加えた双鉤加墨本であつ

三。

② 参謀本「渡海」の「拓本」を多数の漢字者を動員して解説し、「拓本は昨年一年「会全録才五集」として出版された。③その後、日清戦争中の明治二十七年、軍は直接拓本をとって帰り、酒匂本と比較検討し、酒匂の「すりかえ」をかくすために「拓本全面に石灰を塗り、碑文を書きこんだ。

④ 現在伝わる拓本は、この石灰作戦後のものだが、石灰がはびるに従って、拓本に変化があらわゆる。たとえば、日朝関係にとって一番重要な「辛卯年来渡海破」は初期の拓本では明確な字画に拓出されているが、その後の拓本になると「渡海」の位置がずり下ったり「海」が読めなくなったりしている。また大正七年の写真によると「渡海破」の字は見え、昭和十年の写真では「渡海」の字は判読できないほどこぼれている。つまり「来」「渡」「海」の各字は原横面にながったもので「破」字もほとんどダメである。これは塗布した石灰が白日を経てはびて来たためで、初期の拓本にながった碑文の間のタテ線がのちになってあらわ出てくることから「すりかえ」は明らかである。

⑤ 石灰塗布は、大正二年現地を調査した今西竜、昭和十年の池内宏ら学者も見ているが、それを参謀本部のすりかえとみず、なかに「軍字」一体となって碑そのものを日本に運ぼうとした。

以上明らかにされた事実だけでも、広南土王陵碑文を根本資料として「記・紀」の記事を拓大

解釈してくみ立てられた四、五世紀の朝日関係史像なるものは、当然根本的に再検討されなければならぬとしている。

さらに、この種の研究が従来日本でまったく行なわれてこなかった点について「先学の業績にたいする批判的克服の名のもとに、実際には容易に上積みしていく研究のありさ、いいかえると先学によってできあがった四、五世紀の朝日関係史像をもとに自説を合理的に展開する反面、朝鮮の研究者の固いかけには耳をかさうとしない姿勢のなかに、まさに侵略的皇国史観の遺産が根強く残っていると、厳しく批判している。

日本は、朝鮮を植民地支配する向に、多数の御用学者を動員して、古墳、建築、磁器をはじめとして、歴史地理、風俗風習、各種文化財などに対し、ぼう大な調査、研究を行なった。しかしながらこれらの調査、研究は、朝鮮の歴史や文化の独自性、優秀性を発見するためのものではなく、逆に朝鮮人の依他性・従属性など悪い点のみをゆつ造、強調するためのものであった。そして、朝鮮人の自主的精神をまっ殺し、かゆりに植民地根性を植えつけ、支配を容易にするために、これらの研究が利用されたことは、周知のとおりである。こうした植民地支配時代の研究成果人の安易な依頼と、日本人にいまなお根強く残っている「朝鮮人」朝鮮人に対する差別観が、如実にこの広南土王陵碑をめぐり動きの中で現われているように思われる。

槿域



今回から、ここでは「槿域」と題して、朝鮮のもろもろの事を紹介してゆこうと思ひます。

朝鮮の異名について……

▽槿域 『山海経』に「海東君子国有り 衣冠帯劍、

譲を母んで筆はず、薰花草(槿に通ず)』と

云い、又『古今記』に「君子の國、地方千

里、木槿夕」とある所から朝鮮の異名となる。

▽青邱 『海東釋史』(天文類抄)に、青丘七黒星、

軫星の東南にあり、東方三韓の國を主^{そと}どる。

とあるところから朝鮮の異名となった。

▽三十里(八道)江山…朝鮮の南北が三十里(朝鮮の十

里=日本の二里)ある所から、云う。

他に新羅の發生の地名をとり「鷄林」、「ソラボル」、「海東」

「東国」、「大東」、「震域」等の云い方もある。

「Korea (Corea)」は「高麗立地 (Koryuan)」から、發して

いる。仏国ルク王の使者ルプクは蒙古を訪ねた時、朝鮮を

Caulle と紹介、マルユポロは東方見聞録に Carly と

記している。 次回は朝鮮の山河について

朝鮮古語

カンガ カニガ スオルネガ。강수원(水)

お山に月出た カンカンスオルネ

空に機^たおき カンカンスオルネ

雲にをさかけ カンカンスオルネ

星を模様^{まよう}に カンカンスオルネ

トト機織^{かぢ}る カンカンスオルネ

その機織^{かぢ}り上げ カンカンスオルネ

何々つくるぬ カンカンスオルネ

兄^{あに}さん祝言^{いわい}に カンカンスオルネ

輿^{こし}蔽^{おほ}ひしてやる カンカンスオルネ

※五十二年豊臣秀吉の朝鮮侵略水軍を朝鮮南海珍島に迎えた朝鮮の英雄本島臣が、敵の夾襲を救する合図代りに軍中で歌わせたと言う。以後旧八月五日の秋夕(日本のお盆)には全土で歌い踊られている。

金素雲説編「朝鮮童謡選」から



船甲龜

むくげの会報告 三月

むくげの会・朝鮮研究は、引きつづいて「韓国史新論」を基本的なテキストとして、この間、凡そ世紀ころの10世紀ごろまでの筆を学看している。

Mが「部族連盟の時代」をレポートし、三月中旬からだが、オニ章「古代国家の成長」をレポートした。ここで回廊となったのは「任那」と「高麗王(好大王)「神文」のことである。

中世・高校で私達は、当時、朝鮮半島の一部に「日本」の支配する「任那」があり、「任那日本府」という役所を置き統治していた、と習った。しかし、当時の朝鮮、「日本」の関係を考え合わせると、「日本」が統治していたという「任那」の存在を考えると、ほゞきない。むしろ、その区域は、百濟・新羅・日本の干渉回のようなものであった、と考えるのが妥当ではないだろうか。

4月にはいつてもKが、オニ章「古代朝鮮国家」についてレポートしています。内容は、新羅の三回統一、統一新羅の政治と社会、渤海、古代文化の隆盛、などです。

また4月9日には、「4月学生運動について」の拡大学習会を開きました。テーマは、①4月革命と②解放後の韓国学生運動、とした。この為の資料のうち、

①「南朝鮮人民の反米愛国斗争」正統評論、61、5月号、朴慶福と、②韓国学生運動20年、統一朝鮮日報が、述べています。引用の方は連絡を、620日、68日、朝鮮語の方言、月二、三回のスローペースですが、「韓国史新論」の一部と、「朝鮮語四週回」をしています。

6月から、朝鮮語初級講座を、週一回のペースで回講します。奮って参加して下さい。また、(勉強)の尚、初級講座の打ち合わせ(初級宿せ)を、5月31日午後6時半から、勤労会館へ行ないます。(一)

4月×日、旅費算法委員会に往復ハガキを出した。往は、「三月十七日、日中出入国法案が提出された」と新聞にありましたが、現在日中出入法案は、どういつ扱いになっているのか返着願いたい。という内容だった。

予想に反して数日後、復が返ってきました。

「お尋ねの件につきましては、提出されましたが、当学習会の白紙になっておりませんので、未だ審査いたしておりません。右側回答申上げます。

昭和竹馬4月17日、旅費算法委員会

ある議員からの情報によると、五月中旬から、いかにキレたかという、「法」に注目し、抗議を

法ム者、東京と千代田区永田町二丁目、法ム者、東京と千代田区永田町二丁目

朝鮮をめぐるニュース

72 2 ~ 72 4

■ 3月の終りに、高松宮古墳の彩色色の壁画が発見され、その後、この壁画をめぐる様々に論議がなされている。論点の一つは、これまで、中田文化の影響のみを考へ、朝鮮は「近代が「通過」しにすぎないとする偏見に満ちた説に対するものである。上田正昭氏らは、朝鮮が中田の文化を消滅し、それを日本に伝えたと考へるといふ事を主張している。この論議を主柱として、いわゆる「偏見」の回廊までもを包めて、古代日朝関係史が、正しく理解されれば、大変結構なことになる。

■ 69年7月と上程されながらも成立を見なかった「出入口管理法案」が今度は、「出入口法」と改められ3月17日に上程された。これら一連の「法律」が何ら、この法案を「長くする」ものなどではない事は、「11号」に書いてのとおりである。

「評議」のレオなど、回廊がないとは言えないが、官崎肇樹が、「公明5月号」に「自由」書いてくる文法の内容を知る意味で、読んでおくべきだろう。

■ 春バベキニュースとして、4月1日、元山府の争が、69年の日韓交渉の時に進行、にストライキに対し、無罪の判決を下し、その上に

「日韓」時の、しよやな回廊を批判し、それに折して立ち上がるのは当然である、といつま旨の、判決だ。に、この判決が、反動の時代の、狂い咲き、でないことを望む。

■ 2月15日、後援者への、判決がおりた。(ヘワ年)まに、4月21日には、ソウル在学中の、在日韓口ス二人(林清道、具ま漢さん)が、「スパイ」として、逮捕された。

■ 4月19日の、尹秀吉氏に対する東京裁判の逆転有罪判決はヒドイものに、尹氏へのヤ二審判決は、東京地裁、杉本表貞裁判長が、日本においての、政治を命を認める唯一の判決を下しているものである。

日程

● 朝鮮研究 毎週(土)日(6時半)9じ 勤労会館
(5月)10・17・24・31 6日一ウ
14・21・28

● 朝鮮語学習 五・六日共、オ一三(土)日(6時半) X氏宅(六月初級講座予定、希望者は、勤労会館へ、又は、フジまで連絡を)

あとがき

▼ 12号、やっとでき上りました。今回は通信づくりに全員参加。
▼ 孫振斗さん(朝鮮人被害者)のアピールを同封します。
▼ 全氏の話は、朝鮮への関り方のアイマイさを、つかれた気がします。